

現代能歌劇「松風」台本

原作：能「松風」世阿弥作 台本：小菅泰雄

舞台＝舞台背面は「鏡板」に替わる満開の桜の垂れ幕がある。垂れ幕の前には「後座」になって、
舞壇に9名の演奏者が椅子にかけて列ぶ。

管弦楽＝木管四重奏(Fl. Ob. Cl. Fg.各1)。弦楽四重奏(Vn.1 Vn.2 Vla. Vc.各1)。Piano 1。

時 と 所＝平安時代の須磨の浦、文徳天皇の御代の 856 年頃。

第一場「立ちわかれ」

登場人物

在原行平 35 歳＝従四位下の京官。須磨に三年の間蟄居^{ちつきよ}を命ぜられている身（テノール）。

藻汐（もしほ）＝行平が松風と呼ぶ汐汲み姉妹の姉。（ソプラノ）

小藤（こふじ）＝行平が小藤と呼ぶ汐汲み姉妹の妹。（ソプラノ）

舞台＝秋、須磨の浜辺に月が上がった夕刻。ステージ中央に在原行平が立っている。

藻汐と小藤が下手より登場、行平の下手に立つ。

藻汐 行平さま、汐汲みから戻りました。今宵は澄み渡った空に、お月さまが大層美しく輝いております。

行平 秋の月が明るく美しいですね。

小藤 はい、潮が満ちてきて汲むのに大変でしたが、お月さまが汲み分けた桶に二つ入っておりました。

藻汐 私の桶にも二つ入っておりました。

藻汐・小藤 うれしいこと。桶に二つ月影を乗せて帰ってまいりました。

行平 須磨の夕暮れは、何と趣き深いことだろう。（間）

そなた達と一緒に過^{へいせい}すようになって、どれくらい経つたろう。

藻汐 三年でございます。平城天皇のお孫様であらせられる高貴な行平さまに可愛がられて、私藻汐は松風、妹小藤は村雨と呼ばれ幸せです。

行平 この恋がいつまでも続いていれば良かったのだが。正直に言おう。実は因幡に行くことになった。私は弟の業平のように自由奔放に生きていけるたちではない。因幡に行って、前のように仕事をしなければならなくなった。

小藤 もう、須磨を離れなければならないのですか。

藻汐 今迄のように、三人で暮すことはかなわないのですか。

行平 一緒に都に連れて行きたい。連れて行きたいのだ。そなた達を連れて行きたい。連れて行きたいのだ。しかし、因幡はそなた達が暮らせるような所ではない。堅苦しい習慣や仕来たりがあって、須磨のように自由に生きることはできないのだ。そなた達は、貧しくとも須磨で自由に生きていく方がずっと幸せに違いない。

藻汐・小藤 行平様がいらっしゃらない須磨になど、生きていく意味がありません。

藻汐 どうか、三人で幸せにお過ごしてくださいませ。

行平 そのように私を苦しめないでおくれ。辛いことだが、別れを言って因幡に赴くことにした。今は別れ、稲葉暮らしても、そなた達が待っていると聞けば、すぐに帰って来よう。

「立ち別れ 稲葉^{いなば}の山の峰に生うる 松とし聞かば、今帰り来ん」。

さあ、そこの磯馴^{いそなれまつ}松の小枝に、私の狩衣^{かりぎぬ}をかけておこう。いつまでも大事にしておくれ。

松風、村雨、さようなら。（舞台上手に退場する）

藻汐 行平さま。因幡に行かないでください。

小藤 行平さま。因幡に行かないでください。 —— 間 ——

小藤 お姉さま、どうしたら良いでしょう。

藻汐 このようなことになろうとは思いませんでした。これは夢か。夢ならすぐに覚めておくれ。夢ならすぐに覚めておくれ。覚めておくれ！

小藤 どうしたら良いでしょう。

藻汐 前に暮らしていた塩屋に戻って考えましょう。（下手に退場）

小藤 （ステージ裏より悲痛に）ああ、お姉さま、しっかりして下さい。お姉さまー！お姉さまー！

第二場「40年後」

登場人物

僧 = 西国行脚を志す僧 こころざ

藻汐（もしほ） = 行平が松風と呼ぶ汐汲み姉妹の姉。第一幕の直後に落命した亡霊

小藤（こふじ） = 行平が小藤と呼ぶ汐汲み姉妹の妹。藻汐の後を追うように落命亡霊

在原行平 = 正三位中納言、75歳で死去した亡霊

舞台 = 第一幕を下る40年後の醍醐天皇の御代。秋の夜、須磨の浜辺にある荒れ果てた塩屋。
ステージ中央で藻汐が手仕事をしている。

小藤 お姉様、行平様が亡くなられたそうです。（下手から入場し、姉の傍らに掛ける）

藻汐 ええ！ そうですか。お幾つでしたか。

小藤 75歳だったそうです。

藻汐 天に昇れば、行平様に会えるでしょうか。

小藤 きっとお会いできますよね。正三位中納言になられたそうです。お住まいで学問所を開いておられそうです。

藻汐 ご立派な方でしたねえ。行平様が因幡に赴任された後すぐに、悲しみに私は命を落として、あなたも後を追うように命を落としました。

行平様にお会いしたい。行平様にお会いしたくて、40年が過ぎて、40年が過ぎてしまいました。この塩屋を離れることができずに、この塩屋を離れられずに、40年が過ぎて、40年が過ぎてしまった。天に昇って、天に昇って、行平様にお会いしたい。天に昇ってお会いしたい。

小藤 私も行平様にお会いしようございます。この塩屋も荒れるに任せたままです。（間）

僧 今晚は。西国行脚の僧ですが、一夜の宿をお貸しください。

小藤 お姉さま、お坊様が一夜の宿をとおっしゃっております。

藻汐 この荒れ果てた塩屋に、とても立ち入ることは叶いますまい。お断りしなさい。

小藤 主はあのよに申しております。

僧 いえいえ、出家の身ですから。何卒一夜を明かさせてください。

小藤 ご無理ではないでしょうか。

藻汐 お待ちなさい。夜はさぞお寒いでしょう。荒れ果てた塩屋ですが、僅かな火にあたってお過ごしください。

僧 ありがとうございます。それではお邪魔させて戴きます。（ステージ中央、姉妹の下手に立つ）

藻汐 このように荒れ果てた塩屋ですから、ついお断りいたしました。

僧 ご好意に感謝します。須磨の浦の風雅を愛でる旅人ならば、好んで侘び住まいを望むであり、ましよう。（間）

夕方、浜辺で一本の磯馴松を見かけました。在原の行平様が須磨におられた頃、都の人に宛ててこのような歌を歌っています。

「わくらばに問う人あらば須磨の浦に 藻汐たれつつ侘ぶと答えよ」。

もしも誰かに聞かれたら、もしも聞かれたら。須磨の浦で藻汐に濡れて、須磨の浦で藻汐に濡れて、侘びしく暮らすと伝えてほしい。伝えてほしい。

このような歌です。聞くところではその磯馴松は、行平様が愛された松風・村雨姉妹いわれの松ということでした。旅の途中ですがお経を唱えておきました。おや、どうかなさいましたか。

（間）

藻汐 思いが内にあると、どうしても外にでてしまいます。「わくらばに」のお話がとても懐かしくて、思いきれないこの世への執着の涙が、袖を濡らします。

僧 「思いきれないこの世への執着の涙」とは、この世にいない人の言い方ですね。お二人のお名前をお聞かせ下さい。

小藤 いわれの松にお経を唱えてくださいましたお坊様に何を隠すことがありましよう。私たちは、あの松の苔の下で、お経を唱えて頂いた松風・村雨姉妹でございます。行平様に愛されて、お側に仕えさせて戴きました。

時々でも吊ってくださる人もいないのに、今でも汐汲みに懲りず、この塩屋に棲んでいます。

藻汐 ああ恋しい。ああ恋しい。いつになったらお会いできるのでしょうか。いつになったら会えるのでしょうか。これは行平様の形見の狩衣かりぎぬ。同じこの世にいればこそ、今となっては役に立たないこの狩衣。捨ててしまおうかと手に取るたびに、思いは増して、わずかな間も忘れることができません。(衣をかき抱きながら激しく)

寝ても覚めても、後から後から恋心に責められて、どう仕様もなく涙に沈みます。
三途さんずの川にも、絶え間なく流れる涙の早瀬や、乱れる恋の淵があるのです。

小藤 身分違いの恋をした上に、成仏の難しい罪の深い姉妹です。
どうかお坊様、ご回向くださいますよう切にお願い致します。

行平 (ステージ裏から) 松風一、村雨一。

藻汐 まあ嬉しい！あそこに行平様がいらっしゃいますよ。

小藤 情けないお姉さま。どこにもいらっしゃいませんよ。

藻汐 あそこの磯馴松のところに行平様がいらっしゃいますよ。

行平 (上手から謡いながら登場)「立ち別れ 稲葉の山の峰に生うる 松とし聞かば、今帰り来ん」。
(ステージ中央、姉妹と僧の間に立つ)

藻汐・小藤 行平様、お会いしとうございました。
歌にお詠になった通りに帰ってくださって、本当にうれしゅうございます。

行平 ようやくそなた達のところに帰ることができた。そなた達に会いたかった。

藻汐・小藤 お会いしとうございました。

行平 会いたかった。

藻汐 お坊様、どうか私たち姉妹が、行平様と一緒に天に昇れますようにご回向くださいませ。

僧 ともに手に手を取って天に昇れますよう、謹んで回向させて戴きます。

かんじざい ぼさつ ぎょうじんはんにやはら みつたじ しょうけん ごうんかいくう どいつさいく やく
観自在菩薩 行深般若波羅蜜多時 照見五蘊皆空 度一切苦厄

ぎやてい はら ぼうじ しょうわか
羯帝羯帝波羅羯帝 波羅僧羯帝 菩提 僧莎訶

心を込めて、ご一緒に唱えましょう。
観音様が、深い知恵の悟りの修行をされている時、心と身体の五つの要素は実体がないのだと見極められ、一切の苦しみを取り除かれました。
往きて往きて、彼岸ひがんに往き、彼岸に到達した者こそ、悟りそのものです。幸いあれ。

僧が目を閉じて合掌している中を、行平が先に立って上手に退場。藻汐・小藤は僧に一礼の後、行平に従って、上手に藻汐、小藤の順で上手に退場する。

僧 (合掌を解き、ゆっくりと眼を開ける) 夢を見ていた。何と寂さびしく、悲しい夢だったろう。
(外に出て正面の客席後方をを見つめる) おお、夜も明けた。晴れやかな夜明けだ。

松風ばかりが吹き残っている。(客席後方をジッと見つめている)
さあ、西国行脚を続けよう。

幕

台本に使われている言葉と登場人物

世阿弥の言葉 = 上三位の曲

世阿弥は自分の創作した曲にも優劣があることを認めている。世阿弥がよい能だといっている曲は、井筒・通盛・松風村雨・蟻通・忠度などであるが、能の「九位」にあてはめれば、第一位から三位までがすぐれた能「上花」であるという。

在原 行平 (818 - 893年9月6日) は平安時代の日本の歌人、公家。在中納言とも。平城天皇の皇子阿保親王の次男。母は不明、在原業平は弟。古今和歌集によれば文徳天皇のとき、須磨に蟄居を余儀なくされた。このとき、松風、村雨という姉妹の海女を愛したという伝説が謡曲『松風』などに伝え

られている。

「もしほ」と「こふじ」汐汲みにきた多井畑の村長の娘二人「もしほ」と「こふじ」に出会い、行平はそれぞれに「松風」・「村雨」と名付けて愛しました。3年後、行平が都に帰ることになり、この二人の女性と悲しい別れをすることになりました。この別れのシーンは謡曲にも取り入れられ、有名となりました。

藻汐＝古代・万葉の「藻塩(もしお)焼き製法」が生んだ「海人の藻塩」(あまびとのもしお)「藻塩焼き」は、塩田による塩づくりが始まる以前に行われていた海藻を使った製塩法で日本の塩作り原点。

須磨(すま)は摂津国の地名。現在の兵庫県神戸市須磨区にあたる。瀬戸内海を臨む須磨の浦で名高い白砂青松の景勝地。

磯馴松 ※磯馴と書いて、植物の種類を言うときは“そなれ”と読みます。地名の場合“いそなれ”と読むそうです。

狩衣＝その名の通り野外狩猟用のスポーツ服で、着用も簡便で運動性も高いものでした。便利なため一般公家の日常着として愛用されました。次第に院参にも用いられるようになり、時代を経るに従って公服としての色彩も増してきました。ただし狩衣での参内(昇殿)は一切認められず、狩衣に冠をかぶることは特殊な事情を除き決してありません。

蟄居＝公家、武士に適用。門を閉じ屋敷の一室に引き籠もる。原則無期限。政治犯に適用され政権交代により恩赦された。

三途の川＝此岸(現世)と彼岸(あの世)を分ける境目にあるとされる川。一般的に仏教の概念の一つと思われがちだが、実際は仏教に民間信仰が多分に混じって生まれた概念である。オリジナルの仏教の教義にはなく中国で変容した際に付け加えられた偽経である。この経典の日本への渡来は飛鳥時代と思われるが、信仰として広まったのは平安時代末期とされる。

回向＝自分自身の積み重ねた善根功德を相手にふりむけて与えること。

帰依＝勝れたものに対して自己の身心を帰投して依伏信奉することをいう。いまだに釈迦の原語に近いパーリ語を使用していることともあり、帰依は元々の意味でその内容が説かれ盲信との区別が特に強調される。「自帰依自灯明、法帰依法灯明」という場合の「帰依」は、「我は仏法を拠り所にする」という意味である。

彼岸＝極楽浄土(阿弥陀如来が治める浄土の一種)は西方の遙か彼方にあると考えられている。春分と秋分は、太陽が真西に沈むので西方に沈む太陽を礼拝し、遙か彼方の極楽浄土に思いをはせたのが彼岸の始まりである。いつの時代も、人として、生を終えた後の世界への関心の高いことは同じであり、生を終えていった祖先を供養する行事として定着するに至った。